POLE
北海道ポーランド文化協会会誌
2020.5.20

第100号記念号

発行 北海道ポーランド文化協会

〒060-0018 札幌市中央区北 18 条西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com
東京事務所 〒107−0052 東京都港区赤坂 9-6-29-309 音響計画㈱ 霜田気付
電話 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058

2020
7.18(土)→7.26(日)
8:45-22:00【入場無料】

札幌エルプラザ
(北 8 西 3)

1903(明治 36)年 7 月上旬〜9 月 19 日、ロシア帝室地理協会の委嘱による調査団(ブロニスワフ・ピウスツキら 3 名)が北海道アイヌの調査を行いました。約一週間にわたり滞在した平取コタンでは、地域の撮影や聞き取りを行ったほか、多くのアイヌ民具やアイヌ語音声を収集しています。本展示ではこれら貴重な成果と合わせて、地域住民との出会いや交流を紹介し、明治後半代の平取の姿を来館者と共有します。

また、2018 年にはポーランドのジョルィ市博物館とクラクフの日本美術技術博物館“マンガ”館で B・ピウスツキに関する展示会が開催され、本館が協力しました。そうした近年の国際交流の動向も紹介し、ピウスツキが没後 100 年にもたらした縁と今後に生かすべき教訓を考える機会にもします。

川越宗一著『熱源』(直木賞 2020.1)でも取り上げられ話題になったポーランドの民族学者ブロニスワフ・ピウスツキと日高管内平取町のアイヌコタンの関わりを紹介します

《第 95 回例会》

パネル展と講演会と上映会&座談会

平取町立二風谷アイヌ文化博物館 第 25 回特別展

1903 年夏の平取
～B・ピウスツキたちの短期調査より～
移動展 in 札幌

①**〈パネル展〉**2F 交流広場、2020 年 7 月 18 日（土）～26 日（日）8:45～22:00、申込み不要

②**〈講演会〉**「ブロニスワフ・ピウスツキってどんな人?」新井藤子（B・ピウスツキ研究、博物館学）「移動展 in 札幌の見どころ」長田佳宏（二風谷アイヌ文化博物館学芸員）カムイユカラ（神謡）「カケスとカラス」披露：貝澤ユリ子（平取町二風谷アイヌ語教室）、4F 研修室 3、7 月 18 日（土）13:30～15:30、定員先着 15 名（申込み必須）

③**〈上映会&座談会〉**(1)ドキュメンタリー映画『ピウスツキ・ブロニスワフ～流刑囚、民族学者、英雄』2016 ヴァルデマル・チェホフスキ監督 53 分 (2)座談会「ブロニスワフ・ピウスツキ人物伝～史実とフィクションが伝えること」（司会）新井藤子（発言）井上紘一ほか、4F 大研修室 AB、7 月 24 日（金・祝）14:00～16:30、定員先着 30 名（申込み必須）

申込み先（②③に参加ご希望の方は氏名・連絡先を→安藤へ）
080-4071-0956, hokkaidopolandca@gmail.com
※会場が休館となる場合は、延期または中止となります。
共催:当協会，平取町立二風谷アイヌ文化博物館，ポーランド広報文化センター

共催／北海道ポーランド文化協会、平取町立二風谷アイヌ文化博物館
ポーランド広報文化センター

《新刊紹介》

川越宗一著『熱源』文藝春秋、2019.8 ～直木賞受賞によせて

直木賞にアイヌ主人公の「熱源」～研究者は期待とともに指摘も

「熱源」に登場する人物は多くが実在し、これらの人たちを長年、研究してきた北海道大学の井上紘一名誉教授は「受賞おめでとうと申し上げたい。弱者や故郷を失った人たちを描くその姿勢を評価したいし、今後の活動にも期待したい」と述べました。

ただ、作品には現実にはない登場人物同士の会話などフィクションで描かれた場面が複数あるとし「作品をいかに面白くするかという努力を否定しないが、フィクションを入れるならば、何らかの形で創作であることを示してほしい」と述べて、一般の読者が誤った歴史の解釈をしないためにも説明を尽くすべきではないかと指摘しました。（NHK 札幌放送局 WEB、2020.1.15）

フィクションと史実の間で　　新井 藤子

まずこの度は誠におめでたいこと、著者川越宗一氏に心よりお祝いを申し上げます。

受賞を寿ぐ多くの報道の中、NHK 札幌の記事では、史実を取り扱う手法について井上氏の批判的な指摘も取り上げられました。それは情報社会における読み手の捉え方、また知識を得る手法について一石を投じるものといえます。歴史小説におけるフィクション性については、本作の内容にとどまらず、人間の心や頭の中の自由な創造性について有意義な思考や議論が展開できると感じます。

本書においてフィクションという言葉は、史実に触れた際、どの段階でイマジネーションを触発され、それが発動するかを見極める指標ともいえます。

本書でイマジネーション発動の手立て、著者の「熱源」となったものは、ブロニスワフ・ピウスツキに限っていえば、おもに 1970 年代以降、多くの研究者によって掘り起こされた情報で、それらはイマジネーションの介在を最大限まで抑えて構築された史実ですが、そこでも必ず研究者の視座によるバイアスは免れません。

一般に史実は、特にイベント性のない史実は、実は熱をさますような性質ももっており、場合によっては見過ごしてしまうほど楽しくはないものです。必ずしも後世の人々の熱い期待に応えるために出来てはおらず、場合によっては著者も終始魂の熱いままに描き続けたわけではないのかもしれません。

作中のピウスツキのように、熱とは、誰もが己の感動でもって見出すエネルギーとみられます。皆、さまざまな生を各々ただ生き抜いたに過ぎないかもしれないのに、そこに熱が求められるからこそ、実在の人物に史実と異なる動きをさせ創造というダイナミズムに昇華させたといえます。

またこの作品は、川越氏が自分の中に力強く抱えた不動のテーマでもって必死にさぐり当て、手繰り寄せて作った物語であることは疑いがありません。

その意味で、NHK の記事にもある、本書について「期待とともに指摘も」という言葉は理性的であると評価できます。この情報社会でいかなる立場の人々も自分だけの独りよがりに陥らずに感動をもつことの素晴らしさ、また読み手一人一人が自分で考え、時には調べるなどして知を涵養できるポテンシャルに溢れていると思います。

今ほど、学術研究分野と創作創造分野を跨いだ議論が必要とされる時代はないとも感じます。

本書は読み手にとって意味ある熱源を与え続ける手立てになると想像できます。

また、単なる受け身や鵜呑みにとどまらせぬよう力強い言葉を紡いだ井上氏にも、史実を花開かせた方として心よりお祝いを申し上げます。

（あらい・ふじこ、2020.1.16）

ポ文協会員、必読の一冊　　長屋 のり子

本作は、直木賞を受賞、つづいて本屋大賞を受賞するという快挙を為した。二〇一九年夏に刊行されて、この四月も尚、殆ど小説部門のトップを快走している、奇貨と呼ぶべきベストセラー作品。作者川越宗一は、第一作『天地に燦たり』で松本清張賞を受賞している。『熱源』は彼の第二作。弱冠四十二才にしてのこの栄誉。思想の骨組の頑丈な、しかも抒情性に溢れる並々でないストーリーテラーである。『熱源』も、意図的に劇画風に、しかし精緻細密に組み立てられている。圧倒的筆致。

序章にロシア赤軍女性兵士が登場。（彼女は大学で民族学を専攻。蝋管録音で、樺太（サハリン）アイヌの五弦楽器らしい琴の演奏を聴く。―私たちは滅びゆく民と言われています―アイヌの掠れた男の声も聴く。）この設定を伏線として美しい終章を生む。（一九四五

年八月、このトンコリの演奏者イペカラと戦場で遭遇する。そして筒管から響いた言葉が蘇る。―もしあなたと私達の子孫が出会うことがあれば、それがこの場にいる私達の出会いのような幸せなものでありますように―アイヌ叙事詩。）四二六頁に及ぶ壮大な、この歴史小説は紙背にこうした詩と音楽を潜めて魅惑を極める。

第一章「帰還」は一八七六年に始まる物語。樺太（サハリン）アイヌ、山辺安之助（ヤヨマネクフ）、花守信吉（シシラトカ）の北海道対雁（ついしかり）への移住。美少女を巡る二人の清々しい格闘。日本同化教育の圧力、蔑視、憐憫。劣悪な環境にコレラと疱瘡が蔓延して困窮に追い討ちがかかる。天然痘で妻も逝く。石狩に死者を焼く野辺送りの火が絶えない。艱難の果て、故郷樺太に漂流して帰還する安之助（ヤヨマネクフ）。

第二章「サハリン島」帝政ロシア政治犯流刑人としてやってくるポーランド人、ブロニスワフ・ピウスツキの詳細な物語。政治犯となるまでの経緯。絶望の流刑地での、ギリヤークとの交流、信義・信頼を熱源とする彼の蘇生。支配されるべき民などいない確信。

第三章「録（しる）されたもの」樺太（サハリン）アイヌ部落頭領バフンケの姪、チュフサンマとの婚約、結婚、出産。バフンケの養女、五弦琴（トンコリ）の名手イペカラもピウスツキを恋慕する。

第四章「日出づる国」日露戦争の勃発。戦争はいつも弱者に悲惨だ。外来勢力に翻弄される樺太（サハリン）アイヌ社会！眼を瞠るのが、この章の登場人物の多彩。二葉亭四迷、大隈重信、レーニン、ゲンダーヌ…。ピウスツキの出逢う誰もがデフォルメされた熱を持つ。彼らの熱量が溢れ出て読者はその熱さの感覚を共有する。母国の独立戦争のために妻子を残して樺太（サハリン）を去るピウスツキ。弟ユゼフ（独立後のポーランド国元帥）との深い葛藤。

第五章「故郷」では、帝大生金田一京助も登場（余話として、石川啄木さえも…）してアイヌのハウキ、ユーカラをギリシャ叙事詩に拮抗するものと安之助（ヤヨマネクフ）に陶然と賞賛する。掉尾を飾るのは山辺安之助（ヤヨマネクフ）と花守信吉（シシラトカ）の白瀬南極探検隊への壮烈な挺身。アイヌ存在の意義を生命賭して確かめる。一方ピウスツキは、大隈重信に「人の世界の摂理なら、人が変えられる。摂理と闘う」という強い言葉を托して、共和国運動の抗争中に撃たれて墜死する。パリ、セーヌ川で自死という史実を小説は乖離して推理を自在に舞う。奔放な飛躍。死体を一つ自殺に偽装するくらいわけないさ―の政敵の科白を一行刻んで。小説は正にロマン。

終章「熱源」序章の女性兵士とイペカラとの邂逅。序章との呼応の息呑む秀麗。ピウスツキが蝋管に録した叙事詩が戦場の無残荒廃の中で澄んで立ち上る。胸に響交う。同様、五章、安之助（ヤヨマネクフ）の言葉も亦、読者の胸を去らない。―アイヌって言葉は、人って意味なんですよ。強いも弱いも、優れるも劣るもない。生まれたから、生きてゆくのだ。すべてを引き受け、あるいは補いあって。生まれたのだから、生きていい筈だ。自分が誰かということさえ知っていれば、そこに人（アイヌ）は生きている。それが摂理であって欲しい。―

主要登場人物の誰もが、その地を「熱源」と感じた「樺太（サハリン）」。ポ文協会員、必読の一冊。

（ながや・のりこ）

樺太への熱い思い　尾形 芳秀

『熱源』は、サハリン・樺太時代に生きたアイヌ民族をめぐる人間模様を描いた作品である。

時あたかも「アイヌ新法」が制定され、今年は白老町にウポポイ（民族共生象徴空間）国立アイヌ民族博物館と国立民族共生公園が開場する。そういう意味ではタイムリーな出版であり、同時にこの時代のサハリン・樺太の一端を知る入門書となろう。

物語は、唐突ではあるが 1945 年の大戦末期に樺太が最後の戦場となり、ドイツ戦線から転戦してきたソ連軍の女性狙撃手の回想から始まる。そしてこのプロローグはエピローグに受け継がれる。

次いで第一～五章は樺太アイヌと関わった実在の人物に関する書物から大半を引用して展開する。その中で作者のオリジナルといえるのは、それらの書物の読後の感想のかたちで、アイヌ民族の立場への共感を代弁している個所であろう。この作品の『熱源』というタイトルにも、樺太アイヌの故郷回帰への熱い思いが込められている。

作者はこの作品を、実在の人物をモチーフにしたフィクションとしているが、樺太時代を多少なりとも知る者としては、違和感もある。

サハリン・樺太時代の背景について、日ロの領有の経緯やサハリン島時代には先住民族に加え流刑囚の島でもあったことをもっと知るべきだろう。

中でもポーランドからは、政治犯と呼ばれる人々が、流刑囚にも、ロシア軍兵士にも、その他教育者等にも数多くいたのである。決してブロニスワフ・ピウスツキだけではなかったのだ。

また、1875 年から全島がロシア領となって、アイヌ民族は日本人に近いという立場から島を強制退去させられ、彼らのアイデンティティは時代の波に翻弄されることになった。

作品では、当時の書物の引用のため、現在では使われない表記もみられる。当時の表記に忠実はよいが、初めて読む人に誤解は与えないだろうか。

サハリン島時代、ロシアはこの島を沿海州管轄下のサハリン州とし、州都を島の北部のアレクサンドロフスク管区におき、流刑開拓地としてティモフスク管区、南部のコルサコフ管区の三管区制とした。町らしいものはアレクサンドロフスクとコルサコフのみで、その間を結ぶ海路の中継港としてマウカがあるだけだった。町を一歩出ると商店も宿泊施設もない流刑開拓地の世界だった。ときには、開拓を放棄した野盗が横行することもあった。

物語の舞台の島南部では、コルサコフ管区の流刑囚による開拓地はナイバ川までで、それも道とてなく管区を一歩出ると泥濘の道だけだった。つまり島全体が自然の監獄だったのだ。トンナイチャ集落からアイ集落までの移動には獣道しかなく、直線距離で100kmもあり、アイヌ民族とて遠く離れた集落との往来は容易ではなかった。本作の日露戦争におけるトンナイチャ湖畔やナイバ川での戦闘の描写も気になる。

ピウスツキはアイ集落を研究拠点とした。この地域を治めていたバフンケ・エカシは樺太時代にも人格者として知られていた。ピウスツキが妻子を残して島を去るシーンや、パリで死ぬシーンも、諸説あるが、描き方に違和感が残った。（おがた・よしひで）

沢田和彦著『ブロニスワフ・ピウスツキ伝』成文社、2019.12

井上 紘一

世界初の単著評伝

本書は澤田和彦埼玉大学名誉教授が 36 年の研鑽を経て上梓されたピウスツキ評伝。B・ピウスツキ(1866～1918)はリトワニア⇒ペテルブルグ⇒サハリン⇒浦塩⇒日本⇒米国⇒ガリツィア（墺領ポーランド）⇒スイス⇒パリを遍歴し、地球周回をほぼ果たした旅人ですから、一人の著者が彼の全生涯を擱筆するのは至難の業でした。なるほどヴラヂスラフ・ラティシェフ氏の優れたピウスツキ伝（露文、2008）や澤田・井上共編評伝（英露波文、全 2 巻、2010）は既刊ですが、前者はサハリン期までの評伝、後者は専門家 13 名の論文集です。したがって澤田氏の単著評伝は世界初の快挙にほかなりません。

同書はまた 1979 年春に札幌の赤提灯で発足した「ピウスツキ業績復元評価委員会」（CRAP、1981 年以降は同国際委員会 ICRAP）が掲げた事業計画の第 4 項「評伝出版」を成就する壮挙でもあります。日本におけるピウスツキ事績の研究者として 1983 年に ICRAP に参加されて以降、澤田氏は調査研究を孜々として展開、多くの著述を公刊されました。それらは本書の骨格をなしています。

評伝は序章、第一～十四章、終章の 16 章構成。ピウスツキの出生から死に至るまで 51 年余りの生涯を時系列に沿って叙述しています。中でも圧巻は第九章「日本滞在」と第十章「ピウスツキの観た日本と日本人」、全体の 4 分の 1 弱（計 93 ページ）を占めます。澤田氏はピウスツキが第 4 回滞日中(1905.12～1906.8)に際会した 100 名超の日本人を掘り起こし、とどのつまりは日露戦争直後の世相描出にも成功しています。この明治 39 年頃の日本文化・日本人論は氏の博覧強記、真実探究の執念、語学力の所産にほかならず、澤田氏にして初めて可能となった独創的労作というべきでしょう。ですから、せめて両章だけでも早急に英訳され、海外へ向けて発信されるよう願ってやみません。

終章「その後のアイヌ家族」は、ピウスツキがサハリンに残したアイヌ妻チュフサンマとその家族（子息木村助造、その妹大谷キヨ）の「その後」を簡潔に紹介しています。私の試算によれば、彼らの子孫（日本における「ピウスツキ家」に関わる人々）は現在 40 余名を数え、全員が日本で暮らしておられます。

ギリヤークの少女ヴニト

第三章「サハリン島流刑」の一節「ギリヤークの少女ヴニト」（84-86 ページ）は、ニヴフの女流詩人ヴニトとピウスツキの恋愛関係に捧げられています。ヴニトがブロニスワフの子を宿し、彼の離島後に娘のヴァイを出産したとの風聞は種々伝えられていましたが、澤田氏はそれを初めて集成・公刊されたわけです。1897～99 年の出来事でした。つまりヴァイはブロニスワフがもうけた第一子にほかなりません。2019 年 8 月、私は北サハリン東海岸のノグリキにて、ヴァイの曾孫を名乗る 3 人の女性と対話する機会に恵まれました。彼女らがヴァイの末裔である事実は一族の伝承などで承知していたが、ヴニトとピウスツキにまで遡及すると知ったのはごく最近のことだそうです。曾孫の一人イリーナ・オネンコさんは自著『北サハリンとアムール流域の原住少数民族が

利用する植物』(2016)で家族史に言及しています。私は目下、その折に聴取した情報にもとづく家系図を作成中です。

本年 1 月、川越宗一氏が『熱源』で直木賞を取り、受賞後のインタビューでは「嘘をたくさんついた」と恐縮して見せました。小説家の性として、史実にもとづくと謳いながらも読者の受けを狙って捏造を弄することはやむを得ないかも知れません。川越氏は事実、同書の主人公の一人であるブロニスワフ・ピウスツキをめぐっても数多の嘘をつきました。幾つかは人の名誉にかかわる頗る重大で深刻な捏造(フィクション)です。心ある読者は是非とも、川越氏の嘘を看破するべく時宜を得て公刊された澤田氏の『ピウスツキ伝』を繙いてください。その際は拙編訳書『ピウスツキのサハリン民族誌』(2019)*も参照いただけると幸甚です。　(いのうえ・こういち)

* http://hdl.handle.net/10097/00123171

越野 剛

ピウスツキ顕彰の国際的機運

ブロニスワフ・ピウスツキはアイヌ研究で知られるポーランド人の民族学者である。ロシア統治下のリトアニアに生まれ、ツァーリ暗殺を計画する革命家のグループに与した罪を問われてサハリンに流刑となり、その地でニブフ(本書では旧称ギリヤークが用いられる)やアイヌなどの原住民の生活に関心を持った。その後、日本、アメリカを経て、ヨーロッパを転々する数奇な生涯を送る。弟のユゼフの指導する新生ポーランドが久しく失われていた国家の独立を達成するのは、ピウスツキが大戦下のパリで自死してからわずか半年後のことだった。

ピウスツキの名前は今年度の直木賞を受賞した川越宗一の『熱源』によって広く読書人の話題に上った。その背景には彼を顕彰する機運が国際的な研究者のネットワークの間で高まってきたことがあり、沢田和彦氏はその立役者の一人といえる。ポーランド、サハリン、日本などの世界各地に残された資料を丹念に調査して書き上げられたのが、ここに紹介する『ブロニスワフ・ピウスツキ伝』なのである。

不思議な陰影、複雑なドラマ

小説『熱源』は学究肌の人物をあえてハードボイルドな熱血漢として描くことで感動的な物語を提示した。それに対して沢田の伝記はフィクションを排し、記録に基づいて実像に迫るのだが、そうするとピウスツキの人物像にある種の不思議な陰影が浮かび出すのが興味深い。ここではその例として、先住民族と日本人に主人公が抱いた関心について見よう。

ピウスツキがサハリンの先住民族によりそうような共感を示したのは、彼自身がロシア帝国に支配されたリトアニア・ポーランドの出身だからというのはわかりやすい。実際、ニブフやアイヌの生活向上、教育や医療の支援を熱心に行っている。その一方で先住民族の生活や言語文化は知的な関心の対象でもあり、その学術的な功績のおかげで流刑地サハリンから「脱出」することができたといえる。さらにピウスツキに恋愛抒情詩を捧げたというニブフの少女ヴニトや、結婚して子供までもうけたアイヌ女性チュフサンマなどのように、先住民族はロマンスの相手でもありえた。このような位相の異なる動機や関心がピウスツキの中で混然一体となっており、明確な線を引いて区別することができないように感じられるのだ。

ピウスツキの半年あまりの日本滞在についても同じことが観察できる。ここは日露交流史の大家である沢田氏の力量がもっとも発揮された部分であろう。遍歴の民族学者は日本社会の様々な側面に興味を示しながら、とりわけ女性の問題を熱心に取材している。日本の女性に向けたピウスツキのまなざしには、社会主義や婦人解放運動への共感と人類学的な関心が入り混じり、おそらくはロマンスへの希求とも無縁ではない。その点で注目されるのが当時の先端技術であった写真である。ピウスツキは、音楽家の橘糸重や中国の留学生で革命運動に関わった呉弱男といった女性に会った際に彼女たちの写真を所望している。当時の社会で女性が肖像写真を贈るという行為は、かなり親密な間柄でなければありえなかっただろうことは本書でも指摘されている。写真を収集する動機が何であったかはっきりしていない以上、沢田氏は余計な推測を重ねることはしていない。ただし流刑地サハリンでの生活を扱った章で紹介されているように、そもそもピウスツキが撮影技術を学んだのは民族学調査に用いるためであった。ここでもアジアの女性に対する関心の中に、社会的弱者との連帯、学術調査という狙い、そしてセクシャルな欲望とがひとつに解け合っているのではないか。

ピウスツキの伝記から読み取れるのは、帝政ロシアの権力に対する憎悪と恐怖、遠い故郷を思う寂しさと異郷への憧れ、社交性と憂鬱といった複雑な性格のドラマなのである。沢田氏の渉猟した豊かな資料の海から浮かび上がる豊かな人間性こそが本書の醍醐味であろう。　(こしの・ごう)

『週刊読書人』(2020 年 3 月 27 日号)掲載*

* https://dokushojin.com/article.html?i=6814

アイヌたち―「私は彼らを極めて優れた民と思う…」

セルゲイ・ゴルブノフ

(Sergei Gorbunov、ティモフスク博物館主任研究員、樺太アイヌ協会賛助会員)

アイヌとはどんな人たちであろうか。16 世紀以降、東アジアに広大な白斑部を発見し開発するようになったヨーロッパ人が、この民と遭遇する度に自問を重ねてきた。「多毛の人々」「太平洋の髭面」「毛深い民」「[失われた]イスラエル支族の末裔」とも呼ばれたアイヌは、数千年をかけて極東の膨大な領域(アムール流域、沿海地方、サハリン・日本・クリルの島嶼列、そしてまたカムチャツカ南部)に広がっていった。その足跡はシベリアにも見出されるが、彼らはそこから最古の時代(旧石器時代)にわれらの島々にもやってきたのである。

この物静かで柔和、善良で敬虔な民…。ロシア初の世界周航を果たした I・F・クルーゼンシュテルンは以下のように語っている。

> 「私たちが記憶する限り、声高な会話や哄笑とも、いわんや口論とも遭遇する機会は皆無だった…。彼らの謙譲たるや格別で、決して何も求めず、ねだることもなく、彼らにものが供与されたときですら、本当にくれようとしているのか、とためらいつつ受け取るのである…。こうした世にも稀な資質は、高度な教育の所産ではなくて、ひとえに生来のものであるから、管見の及ぶ限り、彼らは極めて優れた民であるとの実感を惹起させる」。

まさにこのアイヌの善良・柔和のゆえに、「アイヌモシリ」(アイヌの大地)は少なくとも過去 1 千年間、近隣諸民族(まずはモンゴル人や日本人、次いでロシア人)による領有権争奪と略奪戦の舞台だったという事態も出来する。至近の 2 世紀は鎚と鉄敷の間で傷めつけられた―彼らの大地はときにロシア、ときには日本の領土となったのだ。この類稀な土着の民の運命には二大国の政治・領土的野心が反映されている。

1945 年、「諸民族の父」ヨシフ・ヴィッサリオノヴィチ・スターリンは、間違いなく彼こそ島嶼部に立地するサハリン州の創設者と見做しうるが、アイヌ共和国の設置も立案した。スターリンの目論見によると、同共和国は北海道東部に加えて、サハリン島やクリル諸島も包摂するはずだったが、彼の企図は同盟国のアメリカ人によって阻止された。もしこれが実現されていたら、われらも日本人も「北方領土問題」に頭を痛めることはなく、隣接諸民族から幾世紀にわたり迫害されてきたアイヌは、その古来からの大地に自前の国家を持ちえたであろう。

現代のいわゆる「民族誌的」アイヌは、13 世紀から 1950 年代初頭までサハリンに在住した。1940 年代末にはサハリンとクリルの日本人住民とともに、アイヌも日本国籍保有者として本国に送還された。しかるに 100 人ほどのアイヌはサハリンに残留し、その子孫は目下サハリン州の島々でも、またその他の旧ソ連領にも暮らしている。加えて、サハリンにはアイヌの末裔でもある多くの土着民(ニヴフ、オロッコ[ウイルタ]、ナーナイ、ウリチ系住民)が、また朝鮮・日本・ロシア系、はたまたポーランド系住民までも在住する。それらの人たちもまた、アイヌと近隣諸民族との民族間結婚の結果この世に生を受けたからである。アイヌ系住民の実数を正確に把握するのは至難であるが、若干の推計によると、その数は二千人に達する可能性があり、その多くは己をアイヌと見做している。しかしながらロシアではアイヌが長らく民族として認知されず、ソ連邦では 20 年にもわたってアイヌ関連出版物の禁止令が布かれていた。日本政府がアイヌを公式に承認したのも 2008 年のことに過ぎない。カムチャツカのアイヌ・リーダーであるアレクセイ・ナカムラはアイヌの認知を求めて、ロシア大統領やカムチャツカ州知事へ重ねて陳情していたが、アンドレイ・バブシュキン人権評議会議長のロシア大統領へ向けた勧告を経て、ヴラヂーミル・プーチンは 2018 年 12 月 11 日、アイヌをロシアの土着少数民族と認めることに同意した。「大民族には小民族を守る責務がある」―これは人権護民官 A・V・バブシュキンがインターネット上で全世界へ発信したメッセージである。

アイヌは極めて古い時代からサハリンに在住、ティモフスク地区も例外ではなかった。ティモフスク博物館では 12 月 3 日、「アイヌ・センター」の創設大会が挙行された。これは博物館に付置された社会団体で、頗る豊かなアイヌ遺産の研究と保存に従事することを目的とする。博物館展示ホールで開催された特別展では、どこの博物館にもひけを取らぬような陳列品が目白押しである。それらは、己を古代アイヌの末裔と見做す才能豊かな名工インナ・シチェチーニナの手造り作品である。彼女の刺繍作品に具現されたアイヌ文様の見事な螺旋はわれらを魅了し、「生活の愛と喜び」を丸ごと内包する

深遠な哲学的意味を、あたかもわれらの視線から隠すかのようである。インナは民族的アイヌ刺繍の技術を見事に掌握している。彼女の先祖には遊牧民のジュンガル人もシベリア・カザークも、そしてむろんロシア人も見出されるとはいえ、アイヌ文化への深甚な興味は彼女の体内に、どうやら遺伝子レベルで内蔵されているらしい。

インナ・シチェチーニナ=左上写真=はペテルブルク装飾工芸カレッジを卒業後、技術デザイン研究所で学び、世界を遍歴する中でモロッコ、スペイン、イタリア、フィンランド、スウェーデン、キルギスタン、フランス、ウクライナ、ウズベキスタン、ラトヴィアを訪れた。現在はカザフスタンに在住、まさにこの地で私はこの芸術家と邂逅した。インナはアイヌの文化と芸術に深い関心を抱き、華麗で色鮮やかな渦巻文様に秘められたものの深奥を極めようと試み、また古代の文様を現代工芸品（例えば日用品の素朴な小袋）に施している。かくてアジア最古の諸民族の一つ[アイヌ]の古代芸術が蘇生し、第二の生命を獲得しているから、この古代芸術は創造への新しい扉、新たな美の萌芽をもたらすような、いまだ目には見えぬ種子を数多孕みつつ生を謳歌している。

今回の企画はインナ・シチェチーニナにとってサハリンで初めての展覧会である。わが国ではアイヌ・コレクションを自慢できるような博物館が頗る僅かだから、彼女の素晴らしいアイヌ刺繍コレクション=右上写真=は、恐らくロシアで唯一の事例であろう。

特別展には北海道アイヌの木彫も、また考古学調査中に発見された若干のアイヌ遺物も展示されている。われらは今や、ティモフスク博物館にアイヌ文化の研究と保存の礎石が据えられた、と宣言することができる。

展示場にはインナ・シチェチーニナが刺繍を施したアイヌの旗―碧いアイヌの空を背景に白雪の上を飛ぶ赤い矢―=右中写真=が陳列されている。これは決して死に絶えることのないアイヌの自意識と文化を象徴する。アイヌ旗は次のような銘文も伴っている。

心は神へ、命は祖国へ[献ず]、栄誉は誰にも[不要なり]

「主」がすべてのアイヌを護りくださるよう、そして世界のすべての民族が常に「愛」と「喜び」と「美」の中にありますように…　（西脇対名夫・井上紘一共訳）

（出典）サハリン州の地元紙「ティモフスク通報」58(通巻 8801)号(2019/12/20)3面所収。

* 文中の（ ）は原注、[ ]は訳注。

ダヌタさん「ブロニスワフの足跡を辿る」世界一周の旅を中断、帰国

「ブロニスワフの足跡を辿って」世界一周旅行中のダヌタさんが日本に到着し、長崎、神戸を訪ねたあと、東京で講演を行い約 50 人が参加しました。○ダヌタさん、日本上陸へ:井上紘一, POLE99 (2020.1)

◆講演会と交流会 in 東京「アイヌの王の足跡を辿って～ルーツの発見と日本・ポーランド関係の強まりを目指して」ダヌタ・オニシュキェヴィチ Spotkanie z Panią Danutą Onyszkiewicz, ポーランド大使館 2020.2.25　　＝左下写真＝ポーランド広報文化センター @PLInst_Tokyo 2 月 25 日 より

ダヌタさんは 3 月半ばに北を目指しましたが、母国と日本で新型コロナウイルス感染が拡大したため旅を中断、3 月末に帰国しました（自己隔離 2 週間）。状況が良くなったら（来年にも）改めて北海道を訪れたいそうです。

※札幌講演は中止になりました。特別講演「ブロニスワフ・ピウスツキの足跡を辿って～ポーランド・日本・アイヌの絆を求めて世界一周の旅」ダヌタ・オニシュキェヴィチ、北大総合博物館 ~~2020.4.25~~（ダヌタさんは、1918 年に独立を回復したポーランド「建国の父」ユゼフ[Józef, ブロニスワフの弟]のひ孫にあたる若い人類学者、探検家。2019 年 1 月アイヌ研究者として名高いブロニスワフの足跡を辿る旅に出て、2020 年 2 月日本に上陸。日本への旅は彼女の世界一周プロジェクトのキーとなります。）（安藤厚）

《ポーランドだより》12
津田 晃岐

初等・中等教育における日本語教育

1. 学制「再」改革

ポーランドの初等・中等教育界はいま大きな節目を迎えている。八年制小学校と四年制高等学校から成っていた旧学制を六三三制に変え「中学校」を新設したのが 1999 年の学制改革。それから 20 年たって、その「中学校」を廃止し昔の八四制に戻そうというのが 2017 年からの学制「再」改革である。

そもそも 1999 年の学制改革は、学校制度の近代化と EU 諸国の教育モデルとを意識して導入されたのだが、専門家によれば、近年増加する若者の攻撃的言動、学力の低下は「中学校」の存在と無関係でないという。それは、「中学校」へ進学して、慣れ親しんだ学習方法、友人関係などの連続性を断たれた「中学生」が不安定な状態に投げ出されるからだというのだ。そうしたリスクから若者を守ろうというのが「再」改革の主眼らしい。

2017 年 1 月に学制改革法案が成立すると、もうその年の秋(2017/18 年度)には「中学校」への新入学が停止された。「中学校」一年生になるはずだった生徒は、新制小学校の七年生となった。その後も年々「再」改革は進行し、今年度「最後の中学生」が高校一年になって「中学校」は姿を消した。

2. 日本語教育プログラム

「中学校」の消滅で一応の区切りはついたものの、改革はまだ続いている。というのも、今年度の高校一年には、「最後の中学生」と新制小学校の卒業生とが同じ一年にいるのだ。しかも、前者は三年で卒業し、後者は四年後に卒業する。教師は、同じ学年に同じ教科を教えていても、二つの「教育プログラム」を用意して教え分けなければならない。

ポーランドの初等・中等教育機関で学習される正規科目には、国民教育省の定める「教育プログラムの基本に関する省令」(日本の「学習指導要領」に相当するが、より法的拘束力が強い)に適合した「教育プログラム」を必ず作成しなければならない。

私も高校で日本語を教え始めたとき、最初の仕事は A4 で 50 頁以上にもなる「日本語教育プログラム」を書くことだった。そして今年度も、四年制高校のために「省令」が改正され、新しい「日本語教育プログラム」を書かなければならなかった。

日本語は「省令」中の「近代外国語」に分類されるが、「省令」は主にヨーロッパ諸語を想定している。だから例えば「省令」の「要求事項」には、「生徒は簡単な発話が理解できる」と「生徒は簡単な文章が理解できる」がさらっと並んで出てきて、「発話」と「文章」の間に大きな溝など考えられていない。

3. Haiku コンクール

ただ、「発話」と「文章」の溝を問題にしないのは、高校生たちも同じだ。時にこちらの心が洗われるほどの純粋さで、どんどん知識を吸収していく。

だからそんな彼らのために、私のクラスでは通常の日本語の授業とは別に、日本文化を肌で体験できるイベントも毎年企画している。浴衣の着付け、書初め展覧会…そして今年は「Haiku―日本の詩形」コンクールを開催した。

冬または春に季題を取ったポーランド語の五七五。応募数は 26 句。どれも高校生らしい瑞々しさと一途さに溢れている。その中で、以下に載せた三句は、透明感ある眼差しと絶妙な措辞とで特に目を引いた入賞句である。

(つだ・てるみち、ポズナン市エスコラピオス会
聖ヨゼフ・カラサンス高等学校　日本語教員)

Liceum Ogólnokształcące Zakonu Pijarów
im. św. Józefa Kalasancjusza w Poznaniu
“Haiku - poezja japońska”コンクール入賞句
(日本語訳 津田晃岐)

dzieci na dworze　外に子ら
grają, robią psikusy　遊びお悪戯(いた)し
prima aprilis　四月馬鹿
Magdalena Frąckowiak, 2B
マグダレナ・フロンツコヴァク、2 年 B 組

płatek śniegu　雪の片(ひら)
topnieje na policzku　頬に溶け――なに
dlaczego płaczesz?　泣いてるの？
Dominika Jopek, 1A po g
ドミニカ・ヨペク、1 年 A 組(三年制)

blask księżycowy　月明り
srebrzy śnieżne pola wsi　雪の畑へ
jak ziarno jasne　銀の種
Oliwia Wiśniewska, 1A po sp
オリヴィア・ヴィシニェフスカ、1 年 A 組(四年制)

ポーランド&ニッポン歳時記 32

療養生活

夫が翻訳した、ポーランドの芸術家ユゼフ・ロバコフスキの映像作品の展覧会が東京で終わったばかり。一方私は油絵やアクリル絵を描くのを一休みしています。絵を描くときに言葉にならない錯綜した気持ちを開放できるのですが、今は手術後なのでむしろやさしい日常生活に戻ることが大事です。

złoto ikony　　**君戻り**
w księżycowej poświacie　　**眠る月影**
mąż śpi po pracy　　**聖画(イコン)かな**
Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

cisza zapadła　　**静かなり**
tylko kwiat na kampusie　　**キャンパスの花**
kwitnie samotnie　　**独り咲く**
Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

唇に秘めたる力絵踏かな
春の雪祇園舞子の髪にのる
春うらら食いけの後の眠けかな
岩見沢市、霜田千代麿

《新会員のひと言》

二風谷アイヌ文化博物館に勤めて

長田 佳宏

日高管内・平取町立二風谷アイヌ文化博物館の長田佳宏と申します。

2019 年 10～12 月に行った特別展「1903 年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」では、協会のご後援をいただき、大変お世話になりました。特に 11 月 17 日に実施した「講演と映画のつどい」では、協会主催の二風谷ツアーでみなさまに当館の取り組みを見ていただくことができました。

特別展の準備を含め 1 年以上にわたる会とのお付き合いのなかで、私自身、北海道とポーランドの文化交流やさまざまな取り組みをもっと知りたいと思うようになりました。2018 年 9 月に博物館の仕事(アイヌ文化の展示協力)でポーランドの日本美術技術博物館“マンガ”館へ行き、クラクフの歴史と文化を見聞したのも一つのきっかけでした。

また、2019 年 11 月には松本照男さんのご紹介でヴィェスワフ・タイス氏、マレック・シヴィツキ氏を平取町に招へいし、地元の PTA 会員に「子どもの権利条約」についてご講演いただくこともできました。そうしたことから、ここ数年ポーランドに関わる深い縁を感じています。

2020 年 7 月には、特別展「1903 年夏の平取」の移動展を札幌エルプラザで計画しています。引き続き北海道ポーランド文化協会にお世話になるとともに、今回からは私も一会員として携わらせていただきます。今回の展示は札幌圏の方々に平取町のアイヌ文化をより深く知っていただく機会になると思い、私としても楽しみにしています。今後ともみなさまのお力添えをよろしくお願いいたします。

(おさだ・よしひろ、2020.2 入会)

雪まつりでフォークダンス

小川 真生

雪まつり会場でフォークダンスを踊るのは初めての体験でした。2020 年 2 月 8 日(土)午後、大通 7 丁目 HBC ポーランド広場特設ステージで札幌民族舞踏研究会の一員として踊ったのです。全 6 曲のうち 2 曲目「クヤヴィヤクチェルボルネヤブシコ」、3 曲目「ククエチカ」、6 曲目「ルブリンのポロネーズ」と 3 曲踊ることになりました。

ポーランドのフォークダンスは衣装も美しく、動きも優美ですから、年末頃からの特別練習も楽しくて、繰り返し練習をして当日に備えました。

「雪は降っても良いけれど、雨や雷は困るわね」などと思っていました。ワクワクして迎えた当日は晴れでした。ワジェンキ公園の水上宮殿とショパン像の前の舞台で、とても晴れがましい気持ちで踊ることができました。床が滑って転びそうでしたが、なんとか持ちこたえて、最後の「ルブリンのポロネーズ」を総勢 34 名で踊り終えたときは、ホッとしました。

道行く観光客の方がカメラを向けてくれたり、応援に来てくれた友人が声を掛けてくれたり、とてもうれしかったです。皆で笑い合えた、忘れられない一日になりました。　(おがわ・まき、2020.2 入会)

親日国ポーランド

鈴木 彰男

毎月購読している『歴史街道』誌のなかに親日国について連載記事があり、親日国の多さに日本人として誇りと感動を覚えました。2014 年 3 月号には〈総力特集〉「シベリアからの奇跡の救出劇～ポーランド孤児を救え」がありました。それまでは漠然と、第二次世界大戦でのドイツ・ソ連の占領下、悲惨な状況におかれ「カティンの森」の悲劇があり、ソ連崩壊後、民主主義国家となり現在に至る程度の認識でしたが、特集を読むと、「ポーランド国民は日本に対し、最も深き尊敬、最も深き感謝、最も温かい友情と愛情を持っている。我々はいつまでも、日本の恩を忘れない…」のだそうです。

――およそ 90 年前、両国を結び付ける出来事がおこる。ロシア革命と内戦のなかポーランド人は「生き地獄」の苦境に陥る。シベリアでは 15 万人以上が飢餓や疾病、戦いに巻き込まれ虐殺された。わずかに残る食べ物を全て子供に与えて息絶えた母親。母親に抱きついたまま凍死する幼児たち。そんな悲劇が酷寒の地の随所で起きていた。

外務省の要請を受けた日本赤十字社は即座に救済を決断。三度に渉る救済活動で 765 人の孤児を保護し日本に迎えた。その後の日本の対応が素晴らしかった…栄養失調となり、伝染病に罹患した子も多かったが、看護婦をはじめ当時の日本人は子供たちをわが弟妹、我が子、わが家族として温かく接し、慈しみ、恢復させ、孤児たちはその感謝を生涯、忘れることはなかった。「善意の心」から生まれた知られざるポーランドとの友情と信頼がいま私たちに語りかける。

親日国となったもう一つの理由は…日露戦争から友情は始まる。日露戦争当時、ロシアからの独立運動を続けていたポーランド人は大国ロシアに挑む東洋の小国日本の姿に大いに勇気づけられた。日本が仇敵ロシアを破ったことにポーランド人は驚喜し、畏敬の念を抱いたのである。自由を重んじる民主国家ポーランド。領土分割、亡国でもポーランド人は自由と誇りを捨てなかった。

日本とポーランドの国民はなぜ親しい気持ちを持ったのか…遠く離れた二つの国が互いに親近感を覚えたのは、民族の誇り、伝統の尊守、勇気などの価値観を理解しあえたからといわれる。

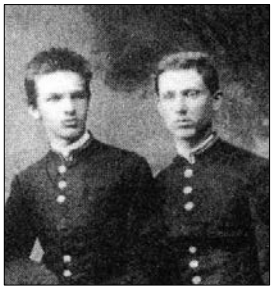
わが友、ポーランド人に乾杯！

（すずき・あきお、2019.11 入会）

《記念寄稿》

もうひとりのピウスツキ

嵩 文彦



北海道に住む私たちにとって馴染みあるのは、本協会のイベントでなんどか取り上げられている兄のブロニスワフ・ピウスツキ=写真(1885)右=ですが、今回は日本ではあまり知られていない、弟の政治家ユゼフ=写真左=について書いてみます。

彼は兄とともに 1887 年当時ポーランドを併合していたロシア帝国のアレクサンドル三世暗殺未遂事件に関与したとして、兄はサハリン流刑 15 年（のち 10 年に減刑）弟ユゼフはシベリア流刑 5 年に処せられました。彼はその後ポーランド社会党に入党し非合法活動に従事しますが、逮捕されワルシャワ要塞に監禁されます。そのご脱獄に成功し、日露戦争（1904～05/明治 37～38 年）の混乱のなか、ポーランドでの武装蜂起計画をたてます。そして日露開戦 5 カ月後の 7 月、日本に援助を求めて横浜から入国しますが、日本にとっては極東で直面しているロシアとの戦いが問題であり、遠いポーランドでの独立運動は関心外のことだったのです。

実は、ユゼフ来日の 2 カ月前の 5 月に、日本政府にピウスツキへの協力はしないよう働きかけるため、ドモフスキという政治家が日本を訪れていました。彼はロシア軍内のポーランド人兵士に離脱・投降を呼びかける文書の作成で日本軍に協力し、ロシア人捕虜とポーランド人捕虜の分離収容を約束させ、日露戦争終結後アメリカ移住希望者にはそれを実現させる約束も取り付けました。

ピウスツキとドモフスキは互いの来日を知りませんでしたが、あるとき偶然出会ってしまいます。二度目に会った時には、二人は 9 時間におよぶ議論をしたそうです。ドモフスキはポーランドの保守が第一でしたが、ピウスツキはもっと広く世界を見ていました。とうぜん意見は一致せず、その年の 7 月、別々に帰国の途につきました。

1918 年、第一次世界大戦後ようやくポーランドは独立を果たし、ユゼフ・ピウスツキはポーランドの初代国家主席に任命されました。ただ、将来真の敵はドイツになると考えていたドモフスキの「反独」は当たっていました。ポーランドは大国に翻弄され続け、ロシアはソ連（ソビエト社会主義共和国連邦）になって独立国ポーランドを配下におさめ、その崩壊まで圧政をおこないました。

（だけ・ふみひこ）

第 71 回さっぽろ雪まつり大通 7 丁目会場 HBC ポーランド広場
2020 年 2 月 4 日（火）～11 日（祝・火）

企画：HBC 北海道放送
制作：陸上自衛隊北部方面通信群

ワジェンキ公園の水上宮殿とショパン像

写真 1

さっぽろ雪まつり大通 7 丁目 HBC ポーランド広場に大雪像「ワジェンキ公園の水上宮殿とショパン像」が作られました。

2 月 4 日午前の雪像引渡式と開会式には、パヴェウ・ミレフスキ駐日ポーランド共和国大使とマリア・ジュラフスカ・ポーランド広報文化センター所長=写真 1=が出席し大使が挨拶しました。

写真 2

2 月 8 日午後には、HBC ポーランド広場特設ステージでワールド KARAOKE グランプリ 2020（バルバラ数井さん［ポーランド］準優勝）=写真 2=、ポーランド・ピアニズム・リサイタル（ミハウ・ソブコヴィアク）、ポーランド民族舞踊（札幌民族舞踊研究会）=写真 3=などポーランド関連の多彩な催しが繰り広げられました。

写真 3

2 月 3～7 日には、第 47 回国際雪像コンクール@大通 11 丁目国際広場（表彰式@HBC ポーランド広場=写真 5=）に、グダンスクからポーランドチームが出場しました。
作品: CHOPIN COMPETITION ショパンコンクール
=写真 4, 6= Mariusz Burdek, Dariusz Sitek, Małgorzata Wiśniewska
（チームリーダー）

（写真 安藤厚、尾形芳秀）

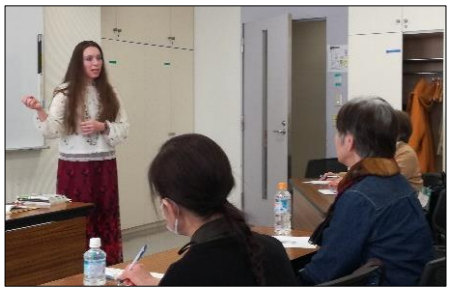
写真 4

写真 5

写真 6

《第 94 回例会》ポーランドサロン(2)報告

ポーランド語でご挨拶



2020 年 4 月 6 日（月）14:00～16:00 札幌エルプラザ4F 大研修室 A で開催。講師はアグニェシュカ・ポヒワさん=右写真=。当初 3 月 5 日の予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大が心配で1カ月延期しました。

当日は窓を開け、座席の間隔を十分にとり、消毒用アルコールを用意するなど細心の用心をして、受講者 14 人で実施しました。

初めて会った時のきちんとした挨拶、親しい間柄の挨拶、自己紹介のことばなど、すぐに使える言葉を習い、二人組になって繰り返し使ってみるなど、一年生になったような新鮮な気持ちでした。休憩後、魔法のことばといわれる便利な言葉も習い、ポーランドの人に会ったら試してみたくなりました。アガさんに沢山質問して、楽しい学習の 2 時間でした。（小林暁子）

新型コロナ禍のポーランドから

ポーランドでは今、ウィルスの影響で国境が封鎖されているだけでなく、日常の外出自体が制限されており、スーパー、食料品店、薬局以外ほとんどのサービス業が休業中です。営業中の商店でも入店者数の制限があり、店舗の前には長い行列ができています。市内交通機関も同様の乗客数制限を設けています。

学校は 3 月 12 日から全国で閉鎖されたままで、メールやインターネットを利用した遠隔授業のみが行なわれています。閉鎖期間は一度の延長を経て、とりあえず復活祭(昨日)まででしたが、つい一昨日 4 月 26 日まで再延長され、それに伴って matura(卒業試験)も 6 月頃に延期されました。

僕個人としては、通勤のストレスや、現場に身を置く緊張感から解放されてホッとしている一方で、遠隔授業の教材づくりには通常の授業の準備より何かと時間が掛かってしまい困っています。

日本でもオリンピックが延期されたり、店舗が休業を強いられたり、会社員も遠隔勤務したりと大きな影響が出ていると聞いています。大変な時期ですが、皆さんもどうかお元気でいらしてください。(津田晃岐&モニカ, 2020.4.13)

=写真=復活祭の散歩で撮ったものです。
ほとんどの人が、似たような格好で外出しています。

2020 年 7 月のイベント

《第 95 回例会》平取町立二風谷アイヌ文化博物館第 25 回特別展「1903 年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」移動展 in 札幌(会場)札幌エルプラザ①〈パネル展〉2020.7.18～26, 2F 交流広場 ②〈講演会〉7.18, 4F 研修室 3 ③〈上映会&座談会〉7.24, 4F 大研修室 AB(詳細は p.1 参照)

入会・退会(2020.1～4、敬称略)

入会:小川真生、長田佳宏、退会:滝口久仁子

ご寄付ありがとうございます(敬称略、順不同)

(2020.1～4、1 口千円)(7)霜田英麿(2)佐藤純一

年会費・ご寄付は下記口座へ納入お願いします

【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735
【加入者名】北海道ポーランド文化協会

または

[北洋銀行(本店営業部)普通預金口座]
[店番号]028[口座番号]0605084
[名義](ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ)
北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚

※ご請求額のある方へは、個別の納入お願い文と郵便振替用紙を同封します。

目　次

《第 95 回例会》平取町立二風谷アイヌ文化博物館第 25 回特別展「1903 年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」移動展 in 札幌 …… 1
《新刊紹介》川越宗一著『熱源』(新井藤子、長屋のり子、尾形芳秀) …… 2
沢田和彦著『ブロニスワフ・ピウスツキ伝』(井上紘一、越野剛) …… 4
アイヌたち―「私は彼らを極めて優れた民と思う…」(セルゲイ・ゴルブノフ、西脇対名夫・井上紘一共訳) …… 6
ダヌタさん「ブロニスワフの足跡を辿る」世界一周の旅を中断、帰国(安藤厚) …… 7
《ポーランドだより》12 初等・中等教育における日本語教育(津田晃岐) …… 8
ポズナン市聖ヨゼフ・カラサンス高等学校“Haiku - poezja japońska”コンクール入賞句(津田晃岐訳) 8
ポーランド&ニッポン歳時記 32(津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿) …… 9
《新会員のひと言》(長田佳宏、小川真生、鈴木彰男) …… 9
《記念寄稿》もうひとりのピウスツキ(嵩文彦) …… 10
第 71 回さっぽろ雪まつり大通 7 丁目会場 HBC ポーランド広場(写真 安藤厚、尾形芳秀) …… 11
《第 94 回例会》ポーランドサロン(2)報告 ポーランド語でご挨拶(小林暁子) …… 11
新型コロナ禍のポーランドから(津田晃岐&モニカ) …… 12

POLE
第 100 号 ポーレ編集委員会
氏間多伊子／熊谷敬子／塚本智宏／松山敏／ラファウ・ジェプカ

POLE No. 100 (May 2020)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Special exhibition of the Nibutani Ainu Culture Museum on B. Piłsudski in Sapporo 1
(New Books) "Netsugen" (Heat source) with Ainu and Polish (B.Piłsudski) heroes by Soichi Kawagoe (F. Arai, N. Nagaya and Y. Ogata) 2
"A biography of Bronisław Piłsudski" by Kazuhiko Sawada (K. Inoue and G. Koshino) 4
Ainu - “I think they are very excellent people...” (Sergei Gorbunov, translated by T.Nishiwaki & K. Inoue) 6
Danuta Onyszkiewicz stopped her round-the-world trip project "Following the Bronislaw’s footsteps" and returned to Poland (A. Ando) 7
Japanese language education in primary and secondary schools in Poland (T. Tsuda) 8
Excellent poems at the haiku contest "Haiku - poezja japońska" of St. Joseph Calasanz High School in Poznań (translated by T. Tsuda) 8
Haiku Yearbook: Poland & Japan 32 (Monika Tsuda, Piotr Wrzeciono and Ch. Simoda) 9
New members’ messages (Y. Osada, M. Ogawa and A. Suzuki) 9
Another Piłsudski: Józef (F. Dake) 10
71st Sapporo Snow Festival, HBC Poland Square (photo by A. Ando and Y. Ogata) 11
Polish Salon (2) Greetings in Polish: Agnieszka Pochyła (A. Kobayashi) 11
From Poland under the novel coronavirus infection (T. & M. Tsuda) 12